



「地域研究コンソーシアム」の設立に向けて

東南アジア研究センターのように、地域名を冠してその地域を対象とした基礎的・総合的な研究を行う研究所や研究センターが全国の多数の大学に設置されている。国立では北海道大学スラブ研究センター、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所など、私立では早稲田大学アジア太平洋研究センター、上智大学アジア文化研究所などがある。また、総合的な地域研究の推進をはかるため、関連研究機関のネットワークの中心組織として、1994年に国立民族学博物館に地域研究企画交流センターが附置され、他の機関との連携のもとに多くの共同研究が進められてきた。また、技術協力・援助などの国際貢献に対する日本の役割がますます高まるなか、国際貢献に直接に関連するものだけでなく、国際文化・地域文化などを教育・研究する学部や研究科が多数設置されるようになった。京都大学には、1998年に地域研究の専門教育研究機関としてアジア・アフリカ地域研究研究科が設置されている。

すでに1980年代後半から地域研究推進の必要性が唱えられていたが、地域に関わるさまざまな研究機関や学部・研究科が多数設立されてきたことをうけて、これら機関の連携により、諸地域を横断する共通課題に関する研究や地域間比較研究、あるいは地域を対象としたより実践的な研究を進めるとともに、地域情報の収集や発信を一層実質的かつ効果的に推進していくことが必要になってきている。とりわけ、国立大学の法人化を控えて、国立大学に設置されている研究所や研究センターのあいだで、昨秋からこのことをめぐって活発な議論が交わされてきた。

その一つの結論として構想されているのが地域研究に関連する全国の研究組織を連携する「地域研究コンソーシアム」の設立である。上記の国立大学・大学共同利用機関の研究所や研究センターの他に東京大学東洋文化研究所、東北大学東北アジア研究センターが加わって、その具体化をいま構想しているところである。コンソーシアムは、地域研究に関わる日本の研究・教育機関の協議体として設置されるもので、当面、東南アジア研究センター、スラブ研究センター、アジア・アフリカ言語文化研究所、地域研究企画交流センターが拠点機関としてその運営を担っていくことが合意されている。コンソーシアムの活動として、(1) 地域研究の主要研究課題に関する連携プログラムの実施、(2) 研究情報の効率的な蓄積と公開の促進、(3) 共同出版の企画・実施、(4) 国際連携の推進、(5) 各機関の枠を超えた人的交流の推進、(6) 若手研究者の育成、(7) 研究支援システムの共同構築、などが計画されており、法人化後をにらんで、地域研究におけるリサーチ・カウンシル的な機能を担う協議体として、今後、他の地域研究関連機関・組織にも参加を呼びかけつつ、その実質化を図っていくことになる。

すでに上記の4機関でその設立に向けた具体化が進んでおり、来る1月9日・10日に東京でその設立に向けたワークショップとシンポジウムが開催される予定である。その詳細は、近く東南アジア研究センターのホームページ等で公開されるので、ご参照いただきたい。

(文責：田中耕司)

主な内容 CONTENTS

「地域研究コンソーシアム」の設立にむけて (Preparations for Area Study Consortium) ……1	東南アジアセミナーに参加して (Essays of the Participants at Southeast Asia Seminar) ……5
拠点大学ワークショップ開催 (Report of Core University Workshop) ……2	人事 (Personnel Changes and New Visiting Research Fellows) ……6
国際シンポジウム報告 (Report of International Symposium in Tokyo) ……2	Colloquium* ……7-8
東南アジア研究センターが所蔵する「外邦図」 (Maps of Areas outside Japanese Territory Prepared by the Former Japanese Army) ……3	東風南信 (Reflections) ……9
21世紀 COE だより (21st Century COE Report) ……3	Visitors' Views* and Conference Information* ……………10-16
東南アジアセミナー開催 (Report of Southeast Asia Seminar) ……4	海外調査便り・出版ニュース (Fieldnotes and Report of Publications) ……17
海田名誉教授が JICA 国際協力功労者に (Emeritus Professor Kaida Selected as a Meritorious Person for International Cooperation by JICA) ……4	研究会報告 (Report of Seminars) ……18-19
	連絡事務所だより (Letters from the Liaison Offices)* ……20

(* Articles in English)

拠点大学ワークショップ開催

拠点大学ワークショップは芝蘭会館において、11月6、7両日、内外から約50名の研究者を集めて開催された。阿部が担当する第3研究グループを中心に「アジアにおける国家・市場・社会・経済協力の役割の展望」に関して、6部構成、すなわち、グローバリゼーションと地域協力、地域統合の展開、外国直接投資と地域統合、市場の失敗・成功、工業・農業の生産性、経済発展の社会的側面のセッションを設けた。各セッションに平均して2本の論文が提出され、各論文に専門家一人を討論者とし、合計14本の論文を参加者全員で検討した。

地域連携に関しては、参加各国で実務についている参加者も多く、学者の空論ではなく、現実世界を動かしているものの議論が熱く語られた。例えば、チュラロンコン大学のスティバンドはタイ外務省と頻繁に共同作業をする専門家、シナワトラ大学のオラーンはタクシン政権のアジア金融協調に関するご意見番、TDRIのチャロンポップはタクシン政権の政策に批判的な論客、ウィサーン（NIDA）はAFTAの実際に関わった学者、マハニはマハティール政権のもと、マレーシアの経済外交を企画する担当官、浦田（早大）はFTAに関して学会と日本政府のパイプ役である。こうした面々がこのワークショップに参加し、お互い



に各国の裏事情を披瀝し、不明な点を質問しあったのである。あたかも、このワークショップがアジアの協調政策を決定する影の政府かとの錯覚を覚えさせるほど、議論が盛り上がったことは特筆に値しよう。

他に、外国直接投資に関しては、根岸（神大）は投資環境がどのように実際の投資決定に影響を与えたのか、岡本（名大）が投資先の場所の決定要因がなにかをさぐる専門

的な実証論文を発表、また金融政策プロパーに関して、バヌボン（タマサート大学）、高阪（阪大）がそれぞれ為替切り下げ、クレジットクランチについて実証論文を発表した。工業・農業の生産性に関しては、ライ（マレーシア科学大）がマレーシア工業の生産性、シャンドラ（シンガポール国立大）が日本とシンガポールの生産性の比較と高齢化について、藤田（センター）がミャンマーの農業の現状について研究報告をした。社会的側面ではTDRIのスラウースがセイフティネット、コー（マレーシア科学大）がマスメディアにおける広告の役割を熱っぽく語った。

このようにどのセッションも厭きることなく2日にわたり、合計16時間、白熱の議論が時間を延長してなされ、成功裡にセミナーを終えた。

（文中、敬称略；文責 阿部茂行）

International Symposium on Alternative Approaches to Enhancing Small-Scale Livelihoods and Natural Resource Management in Marginal Areas: Experience in Monsoon Asia

2003年10月29～30日、東京の国際連合大学において、「限界地域における小規模生業・自然資源管理の改善のための新たな手法——アジアモンスーン地域の経験」と題する国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムは、国際連合大学、(独)国際農林水産業研究センターと共同で開催したもので、中国、韓国、ベトナム、ラオス、タイ、インドネシア、インド、ネパール、アメリカ、日本などから約80人の研究者や実務家が出席した。世界人口の約3分の2がアジアモンスーン地域に暮らしているが、その多くは自然資源が脆弱で環境の劣化が著しい限界地域に住んでいる。このような限界地域においては、いわゆる近代的な農業・資源管理手法を適用していくことには限界がある。そこで、現地での経験を結集してさまざまな代替的なアプローチを探ることを目的としたものである。2日間の会議では、Keynote Presentationsに続いて、Agro-diversity Management、Farm Management and Livelihoods、Forest Resources Management、Upscaling Farmers' Technology、Institutional Reform and Empowermentと題する5つのセッ

国際シンポジウム報告



ションで合計16のペーパーが発表された後、小規模生業のための技術改良や経営改善の手法開発における政府と農民の役割、市場経済の拡大と効用、自然資源の多面的な利用と管理、生業の多様性とセーフティネットなどについて活発な議論が繰り広げられた。同時に、このような課題に挑戦していくために、地域横断的かつ組織横断的な研究ネットワークが有効であり、その確立に向けて今後も共同した活動を続けていくことが確認された。なお、本シンポジウムのプログラムなどは以下のサイトで公開されている。

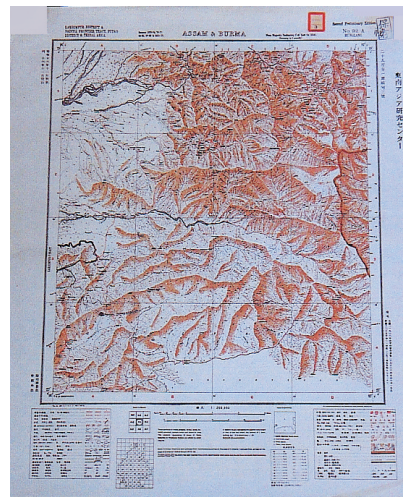
<http://www.unu.edu/env/plec/marginal/>

また、2003年度末をめどに国際連合大学から講演要旨集を発行する予定である。（文責：河野泰之）

東南アジア研究センター所蔵の「外邦図」

旧日本軍は、現在の日本国内および国外に関する地図類を多数製作し、軍事目的に使用するとともに、民間の利用にも供してきた。このうち、国内の地図の管理・更新については、第二次世界大戦の終結後、国土交通省（旧建設省）国土地理院や海上保安庁海洋情報部が引き継いだ。しかし、外邦図と呼ばれる旧植民地や占領地、占領予定地域に関する地図については、いずれの日本政府機関からも管理の対象外とされ、その存在すらごく一部の人々に知られているだけであった。ところが近年、製作されてからすでに半世紀を経過して、外邦図の歴史的価値、すなわち地域の環境や景観の変化を辿る資料としての価値が注目されている[小林 2003]。

東南アジア研究センターは、東南アジア（ミャンマー、タイ、ベトナム、ラオス、カンボジア、インドネシア、フィリピン）や東アジア（朝鮮半島、中国）のほか、旧ソビエト連邦、スリランカ、インド、バングラデシュ、ニコバル諸島、ニューギニア、メラネシア、オーストラリア、ハワイ、アラスカ、マダガスカル、ヨーロッパ各地の外邦図、合計約1万枚を所蔵している。これらの地図は、旧陸軍参謀本部から旧資源科学研究所を経て、浅井辰郎氏（元お茶の水女子大学教授）によって、1971年から1976年にかけて東南アジア研究センターに寄贈されたものである[久武 2003]。この外邦図コレクションは、東北大学やお茶の水女子大学が所蔵するコレクションと並ぶ有数のものであり、本年6月には小林茂氏（大阪大学文学部教授）を中心とす



昭和16年（1941年）11月に陸地測量部参謀本部から発行されたアッサム・ビルマ地域の地形図（縮尺25万分の1）

る外邦図研究会のメンバーが見学に来られた。

今後も、この外邦図コレクションの整備を進め、その多面的な利用を促進していきたい。なお、地図目録については以下の URL に掲載されている。

http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/index_ja.htm

引用文献

小林茂. 2003. 「外邦図研究の現状と課題——平成14年度の共同研究から」『平成15年度日本国際地図学会定期大会・沖縄地理学会大会研究発表予稿集』, 44-45ページ所収.

久武哲也. 2003. 「旧資源科学研究所所蔵の外邦図と日本の大学・研究施設等所蔵の外邦図の系譜関係」『外邦図研究ニュースレター』1: 15-20. (文責：河野泰之)

21世紀 COE だより

人間理解へ向けた共同研究拠点のマネジメント

ヤンゴン・フィールドステーションでは、人間理解を目指して、歴史、地理、農学、動物学、植物学と多岐にわたる分野のメンバーが共同研究を行っている。カウンターパート機関からは教官だけでなく、博士課程の大学院生も加わっている。調査地では、さまざまな専門分野からの視点を共有できるように合同で調査を行っている。このような合同調査は、調査地で教官と学生が共同して調査を行う機会でもあり、現場での教育活動を進める上でも効果的だ。現在、ミャンマーの西海岸、ベンガル湾沿いのラカイン州のグワで農村・漁村の比較研究と、イラワジデルタに位置するマウービンの農村を調査している。今回は、今年度から始めたイラワジ管区の調査について簡単に紹介しようと思う。

田んぼと屋敷林のモザイクが、イラワジデルタの景観である。屋敷林には、果樹や竹をはじめとする有用植物が植えられ、ときには畑が作られることもある。このような空間は人間活動の影響の大きな環境なのだが、野生生物の生



田んぼと屋敷林のモザイク——イラワジデルタ

息場所としても機能している。これらの生物は人にとっての資源でもある。水田には、水田に特有の魚類が生息し、大変重要な食糧資源となっている。ミャンマーでは干物にしたライギョの一種 (*Channa striata*) は、贈り物にも使われるほどに好まれる。この魚も水田とその周辺に生息しており、水田環境に育つ生物たちが食文化にも影響を与えているといえるだろう。また、水田のような人為的環境が、人が利用できるほどの生物資源を養っているのだから、人為的環境を生物の生息場所としてもっと積極的に評価していく必要があるだろう。

イラワジデルタに住んでいる人々に目を移すと、ビルマ族とカレン族の人々の共存が見えてくる。私たちの調査村でも、ビルマ族の村、カレン族の村がある。これらの村は隣り合っているにもかかわらず、それぞれビルマ族同士、カレン族同士で結婚する。このような村がある一方、ビルマ族とカレン族で結婚する村も近くにあり、民族の共存のあり方がさまざまに興味深い。では、いったいどのような価値観がこのような共存を支えているのだろうか。まだ調査が始まったばかりで、今すぐにこれに答えることはできない。しかし今後、人々の日々の暮らしに接していく中で、イラワジデルタに暮らす人々がどのような関係性を築きながら生きているのかを理解していきたいと考えている。

(文責：COE 研究員 大西信弘)

第27回東南アジアセミナー

「開かれゆく東南アジア大陸部——市場経済化の多面性」

第27回東南アジアセミナーは、「開かれゆく東南アジア大陸部——市場経済化の多面性」と題して、26名の受講生を受け入れ、9月1日から5日まで開催された。今回は、大陸部東南アジアの旧社会主義圏に属する地域（特にベトナム、ラオス、ミャンマー）における近年の市場経済移行に伴う諸問題に焦点をあて、ヒト・モノ・カネの移動増大の諸相、開発と環境の相克、民族の動態など、当該地域で生じている大きな変化のうねりを、狭義の経済問題に限定せず、さまざまな視点から総合的にとらえることに主眼をおいた。

《総論》

▽阿部茂行・Srawooth Paitoonpong (Thailand Development Research Institute)・Yongyuth Chalamwong (Thailand Development Research Institute)「ASEAN 10の現状と課題——大陸部旧社会主義国を中心に」▽田中耕司「環境利用史からみた市場経済化の下での生業変化」《ミャンマーを中心として》

▽藤田幸一「ミャンマーの市場経済化と農村」▽速水洋子「大陸山地部からみた社会文化変容——ミャンマーと北タイ」▽山田勇「雲南・四川・ミャンマーの生態資源」

《ラオスを中心として》

▽安藤和雄「東南アジア大陸山地部の生態と生業変化」▽竹田晋也 (ASAFAS)「ラオスの土地政策と森林利用」▽横山智 (熊本大学)「ラオス北部山岳地帯における経済活動の空間構造」

《ベトナム》

▽A. テリー・ランボー「The Development Situation in Vietnam's Uplands」▽河野泰之「ベトナム・デルタ地帯の農村変容」▽樫永真佐夫 (国立民族学博物

館)「ベトナムにおける市場経済化の中の少数民族文化」

《総括》

▽松林公蔵「東南アジア大陸部とは何か——ミャンマーとインドネシアの比較医学調査からのひとつの試論」

セミナーにおける議論は日を追うにつれ白熱、好評を得た。センターは、他の研究機関に先駆けるように、最近まで入域することさえ困難であった当該地域においてフィールドワークを重ねてきたわけで、その成果を披露し、議論の材料をいち早く提供するという当初のねらいは成功したといつてよい。例年、特定の専門領域を軸にテーマを設定してきたセミナーを、東南アジアの中でも特定の地域に限定して専門分野横断的に組むという試みは、よかったように思う。

(文責：

藤田幸一)



受講生による発表



議論は日を追うにつれ白熱した

海田能宏名誉教授が2003年度 JICA 国際協力功労者に



海田能宏名誉教授（2003年3月退官）が国際協力事業団の2003年度国際協力功労者表彰を受けた。功労者表彰は途上国の人材育成や社会発展に貢献した個人・団体を表彰するもので、今年度23名の個人表彰者の一人として選ばれた。

1986年に開始した研究協力「バングラデシュ農業・農村開発

研究」以来、研究協力「農村開発実験」「住民参加型農村開発行政支援プロジェクト」まで永年にわたり専門家として参加し、事業団の国内支援委員会委員長を担うなど、バングラデシュの農村開発に一貫して尽してきた。協力成果である「リンク・モデル（農村住民と農村サービス行政機関を結ぶ制度的枠組み）」は、バングラデシュ農村の実態

にあった有効な開発モデルとして発展が期待されている。また、協力成果を書籍や論文として積極的に発信してきた。

海田名誉教授は、1986年以来、農学研究科熱帯農学専攻の大学院生やバングラデシュからの留学生らを上の研究協力プロジェクトに送り込み、また、センター及び学内外の日本人研究者のみならずバングラデシュ農業大学、農村開発アカデミーや農村開発公社の研究者らとの共同研究を組織して、上の研究成果を収めた。海田名誉教授は「安藤和雄センター助教授ら多くの仲間たちとの永年の共同研究の成果としてのリンク・モデルが認められたもの」と、受賞の喜びを語っている。リンク・モデルに至る成果は、本年10月、編著（『バングラデシュ農村開発実践研究——新しい協力関係を求めて』コモンズ、350p）として出版された。

なお、同名誉教授は退官後もバングラデシュのプロジェクト現場に滞在しており、授賞式は国際協力事業団バングラデシュ事務所での専門家会合の席で執り行なわれた。

仁平 貴子



参加する前は自分の思考レベルでついていけるか不安でしたが、終わってみて思うのは「飛び込んでみてよかった！」ということです。今回のセミナーに参加しようと思った理由は、東南アジア地域研究という視点からミャンマーの開発にどのように関わっていけるか、その答えを求めたかったからです。ミャンマーに対する興味はサークル活動としてミャンマーの児童・障害者を対象に寄付や文化交流を行ってきたことがきっかけで、当初は開発学を勉強して開発に関わるという将来を考えていました。ですが次第にミャンマーの特殊な政治経済の動向、文化・社会的特異性を強く感じるようになると、その国と向き合うには国の内側からの研究と、それに基づいた開発戦略の考察も有効なのではと思うようになったのです。開発と地域研究というテーマは他の参加者の方々も一貫して持っていた興味だったので、セミナーでは地域研究の視点から開発の可能性を考察する機会を得ることができました。

講師の方々の地域に密着した研究によるお話は、内側からの大陸部アジアを理解させてくれるものでした。地域で起こっている現象と外の世界とのつながりや、他のアジアの国々との比較の視点も盛り込まれ、視野を広く持ち個別テーマに臨むことができました。今回のテーマの下では参

加者によって関心のある国が異なっているため、討論の時間では共通したテーマでの展開が難しかった点もありますが、一方で異なる研究背景・興味から様々な質問が出たので、それらを聞きながら一つの事象に対して多様な切り口の問題提起がなされることに驚きました。

メインテーマであった東南アジア大陸部で起こっているグローバリゼーション、市場経済化の多面性について、自分は以前から「一元的な受身の変化」と捉えていました。セミナーに参加してみてわかったことは、そこに住む人々がそれらを受け止め自らを適応させていこうとする「主体的な営み」でもあり、それは一概に外から一方的に押し寄せる波に翻弄されるだけではないということです。市場経済化への適応は人々の生きていく遅しきであり、それに伴う文化社会的変容は良い悪いの評価を超えて、人々の知恵から生まれるものではないかと思いました。「開発の主体はその国に住む人々」という肝心なことを改めて気付かされました。開発に地域研究者がもっと入り込んでいくべきか？講師の方々は試行錯誤の研究活動を通し、この問いに対する様々なスタンスをお持ちで、どれも説得力あるものでした。セミナー冒頭の自己紹介で、自分は地域研究の領域に進むべきか考えているモラトリアムの最中だと言いましたが、何人かの講師の方は「研究は何年やってもモラトリアムですよ」とおっしゃいました。セミナーを終え、その意味するところが見えてきた気がします。今後も東南アジアセミナーを続けていかれることを願っています。

(亜細亜大学国際関係学部)

東南アジアセミナーに参加して

大島 宏之



今回私は東南アジアの市場経済化の実情や人々の生活の変容などを学びたく、また集まった方々と講義を通じて理解を深める絶好の機会と思い迷わず参加を申し込みました。そしていまセミナーの全日程を終えてみると得たものは大変大きかったと思います。

講義では諸先生方がフィールドワークをベースに行ったさまざまな分析による考察や問題提起はとても新鮮でした。私は自分が研究を通じて得た成果をもとに理想的な東南アジアのあり方を模索し、できる限りその発展のために役立てたいと考えていました。しかし、討論においては先生より「現地の住民でもないのに自分の考えた理想を当てはめようとするなんておこがましいにもほどがある」という発言を受けたとき、それまでの自分の視点と全く違った主張に、はっとさせられました。自分が生活しているわけでもないのに彼らの伝統・文化などを評価してやろうという考え自体が浅はかなことであり、部外者は求められてもいないのにむやみに手を出すべきではない。このような相手を尊重する思考は今までの私に欠けていたものであり、研究で得た成果をもとに何かを与えたいと思っていた自分の姿

勢を改めて考え直す貴重な意見でした。同時にそれまで開発経済学分野で世銀・IMFのことがばかり学んでいた私は文化人類学における懐の深さのような魅力を感じずにはいられませんでした。

参加してみて気づいたセミナーの魅力は、なんといっても参加者との交流でした。東南アジアという共通点によりみなさんと初対面同士とは思えないほど仲良くなれました。同時に各人が異なる問題意識をもっていったため議論が発展し、時には大胆発言もありいつも刺激的で講義後も残って話し込んだりしていました。セミナーを終える頃にはすっかり友達になっていて、今回知り合った方たちとこれからも有意義な交流ができると思います。

一つ残念であったのは自由討論が全員で行われたため率直な意見が出にくい面があり、効率もあまりよくなかったのではないかとことです。プレゼンをした先生一人につき5・6人程度のグループをつくり、テーマごとに討論をしたら、より深く議論でき充実した時間になったのではないかと思います。

最後になりましたが、東南アジアセミナーを企画・運営してくださったセンターの皆様方には大変感謝しております。普段の研究・文献講読では得られない経験をさせていただきました。このような貴重な機会を与えてくれる本セミナーが今後も継続されることを心より願っております。

(東北大学農学部)

人 事

教官人事

<新任>



柴山守教授（2003年10月1日付）。1947年4月13日生。1970年3月立命館大学理工学部卒業。91年5月京都大学工学博士号取得。82年12月京都大学東南アジア研究センター資料部助手。88年4月大阪国際大学経営情報学部助教授。93年4月同学部教授。95年10月大阪市立大学商学部教授。96年10月同大学学術情報総合センター教授。2003年同大学大学院創造都市研究科教授。

〔主要論文〕

The Computer Concordance to the Law of the Three Seals. Amarin Publications, 1990. (共編著) ▽Implementation of Multimedia Workstation Using Open Source Software. *Journal of Geoinformatics* 12(2), 2000. (共著) ▽Digital Archives Using XML Description and Application to Historical Resources. In *Proceedings of the Sixth REKIHAKU International Symposium*, 2003.



岡本正明助教授（2003年9月1日付）。1971年7月2日生。1994年3月京都大学法学部卒業。96年3月京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了。99年3月同研究科博士後期課程研究指導認定退学。96年4月日本学術振興会特別研究員。99年4月東南アジア研究センター非常勤研究員。

2001年4月 JICA 技術協力専門家（インドネシア）。03年4月国立民族学博物館外来研究員。

〔主要論文〕

「革命期を生き抜いた植民地期原住民行政官吏（パンレ・プラジャ）——インドネシア・西ジャワ州の場合」『東南アジア研究』38(2), 2000. ▽「改革派に転向したスハルト期地方エリートたち——バンテン州新設の政治過程に焦点を当てて」『アジア・アフリカ地域研究』第1号, 2001. ▽「インドネシアにおける地方分権について——国家統合のための分権プロジェクトの行方」『地方行政と地方分権』（JICA 国総研報告書）所収, 2001.

事務官人事

□横井邦夫教務掛長は近畿地区国立大学等職員統一採用試験事務室室長に配置換。後任に松下裕之総務部企画課共通教育推進掛主任（11月1日付け）。

外国人研究者人事

■外国人研究員



・Lamberto Raymundo Ocampo（フィリピン）。フィリピン国立歴史研究所所長。招へい期間2003年4月28日～10月27日。研究題目「リサーチとフィリピン『国家』の出現」



・Rosnah Binti Suliman（マレーシア）。マレーシア国民大学図書館司書・資料部長。2003年5月14日～11月13日。「東南アジア研究に関するインターネット情報目録」



・Srawooth Paitoonpong（タイ）。タイ開発研究所上級研究員。2003年5月26日～11月25日。「タイの人的資源と労働市場——日本から何を学べるか」



・Pipat Patanaponpaiboon（タイ）。チュラロンコン大学大学院環境科学連合所長。2003年6月9日～2004年6月8日。「環境倫理促進のためのマングローブ生態系修復の役割」



・Cho Cho San（ミャンマー）。イェジン農科大学農業経済学科講師。2003年7月28日～2004年1月27日。「灌漑地域の農民の農業生産・所得・消費に及ぼすマクロ政策のインパクト」



・Maria Antonia Yunita Triwardani Winarto（インドネシア）。インドネシア大学社会政策学部人類学科主席講師。2003年8月1日～2004年1月31日。「東南アジアにおける農法展開——インドネシア・ベトナム・カンボジアの比較の視点から」



・Salvacion Manuel Arlante（フィリピン）。フィリピン大学ディリマン校図書館司書・図書館学研究所上級講師。2003年9月1日～2004年2月29日。「東南アジア研究センター所蔵フィリピン研究関係特別コレクションとフィリピン語コレクションの国際基準に準拠した整備」



・Aung Than（ミャンマー）ミャンマー森林省森林局森林研究所コンサルタント。2003年11月1日～2004年4月30日。「ミャンマーにおける熱帯林業の持続的開発」

■外国人共同研究者

・Wimonrart Issarathumnoon（タイ）。チュラロンコン大学建築学部講師。2003年6月1日～2004年1月31日。 ↗

©"The Stories Nations Tell: Reflections on Nationalist Historiography and Implications for National and Regional Identity" by Donna J. Amoroso, April 24, 2003.

Histories are narratives, like life stories, and can be told in different ways. This talk examined the underlying logic of national stories and some recent challenges to nationalist historiography in Southeast Asia. The ongoing nationalist project has had several goals: to claim historical agency in the context of decolonization and neo-colonialism; to naturalize the nation-state through narrative construction of origins and lineages; and to define membership in regional, ethnic, familial, gendered, and ideological ways. These goals have led to exclusions from the nationalist narrative, as well, especially of ideological losers, outlying regions, ethnic minorities, and women.

In Malaysia, a powerful paradigm juxtaposes extreme ethno-nationalism with the delicate ethnic balancing act that has achieved national success. But this communal paradigm and its related convention of elite-centered narrative has obscured ideological and intra-ethnic differences and prevented the development of a more inclusive, democratic public discourse. In another example, Thailand's nationalist historiography is replete with images of Burmese villains and inferior Cambodians. These narratives are becoming problematic as Thailand's capitalist expansion brings it into more intimate contact with its neighbors. In both cases, narrative strategies that accomplished certain goals in the immediate postcolonial era have serious disadvantages in the democratizing, regionalizing present.

© "Culture, Kinship, and Social Organization in Vietnam" by Neil Jamieson, May 22, 2003.

For a relatively successful nation-state exhibiting

rapid economic growth, Vietnam remains a kinship society rather than a civil society to an exceptional, if not unique, degree. The extensive use of kinship as a model for organizing social life and relationships is often in conflict with the modernizing paradigm of a state trying to implement policies based on more egalitarian, impersonal, economically rational, and universal principles.

While Vietnam is explicitly a patrilineal society, on both paternal and maternal sides Vietnamese maintain active links to a very wide network of aunts, uncles, cousins, and their spouses. Such networks are both a form of civil society and a source of social capital.

This kinship model is extended to the larger society. There are about 60 terms, mostly kin terms, from which a speaker must choose the appropriate form of address and self-reference when dealing with others. Pairs of kin terms, one for address and one

for self-reference, constitute an indigenous taxonomy of social relationships. For example, unrelated people may have a relationship

that approximates that between father's younger brother and his niece, or between older brother and younger brother, and are addressed accordingly.

The family is the core group, but other groups based on some commonality, such as place of origin, school, or military unit, are formed using this model. Solidarity, trust, cooperation, and mutual assistance are stronger when people share a hierarchy and each has an assured place.

Evolving ways to reconcile this indigenous, thoroughly relational model of society with the impersonal imperatives of modernization and industrialization will be a major issue for Vietnam in the coming decades.

©"Aging and Disease: Universality and Diversity" by Matsubayashi Kozo, June 26, 2003.

One myth about aging is "The elderly are alike." On ↗

Colloquium

↘ 「町づくりの研究——日本における歴史的コミュニティ保存の、下からのアプローチをどうタイに応用するか」

■招へい外国人学者

・Lye Tuck-Po (マレーシア)。フリー・コンサルタント。6月9日～7月31日。「マレーシアにおける自然保護地区管理とオラン・アスリの社会変容」

・Phua Kai Lit (マレーシア)。マレーシア国際医療大学地域医療部門上級研究員。7月1日～9月30日。「日本人高齢者に対する保健福祉サービスからマレーシアが学ぶもの」

・Wu Xiao An (中華人民共和国)。北京大学歴史学科助教授。10月1～18日。「東南アジアにおける社会的流動

(フロー)に関する動態的研究」

・Romdiati Haning (インドネシア)。LIPI人口問題研究所研究員。10月5日～11月3日。「日本におけるインドネシア人労働者」

・Suleeman Naruemon Wongsuphap (タイ)。プリンス・オブ・ソンクラ大学教養学部講師。10月7～27日。「『中産階級』に関する共同研究」

・Riza Sihbudi (インドネシア)。LIPI政治研究センター研究員。10月7日～11月5日。「イスラームと民主主義——1990年代およびそれ以降のムスリムにおける民主化に関する諸問題」

↘ the other hand, because of the infirmities of old age, it is also said, "As people grow old, they become unequal."

Biologically, the phenomena commonly associated with aging—obstinacy, bent back, white hair, weak eyesight and hearing—are recognized by people everywhere in the world. Strehler stated as a principle that aging is characterized by (1) universality, (2) progressiveness, (3) deleteriousness, and (4) intrinsicity.

Much research on aging indicates that individual differences become greater with age. Consider 85-year-olds for a moment. At that age, some are hale and healthy, while some in developed countries need custodial care. In West Papua or Tibet, there are few people alive beyond the age 75 or so. It might be assumed that such individual differences among the elderly are partly the result of heredity—that is, of natural causes. However, the influence of lifestyle, which is closely related to the natural and cultural environment, cannot be ignored.

In order to study the phenomena of human aging, it is important therefore to conduct research among aged people in a variety of locations where the natural and cultural environments are completely different. In this colloquium, I discussed both universality and diversity in aging phenomena, comparing the results of comprehensive geriatric assessment of the elderly in Korea, West Java, and Japan.

©"Assimilation or Sinicization? Chinese Factors in Southeast Asia from an Inter-Regional Studies Perspective" by Hamashita Takeshi, July 11, 2003.

The growing relationship between Southeast Asia and China in recent years and concurrent reemphasis of Chineseness in Southeast Asia urge us to reexamine the polarized structure of argument between assimilation and Sinicization and the historical background which gave rise to these theories. For example, the Chinese community has always been an inseparable part of the everyday life of Thai society. Therefore, research on Chineseness in Thai society should focus not only on Chinese elements, but should take a relational perspective that would enable us to look into Chinese inter-relations with surrounding non-Chinese communities.

In southern Thailand, the Lim Ko Nieu goddess is at once a manifestation of Chineseness and a symbol of co-existence between Chinese and Muslims. Chao-mae (or Goddess) Lim Ko Nieu, a venerable lady of Pattani, is widely believed to have played an

important role in the history and legend of Pattani province. Her origin was said to be in Hokkien province, since her elder brother Lim Tao Kien had fled from there to escape capture and left exciting accounts of fighting along the Hokkien coast. He settled in Pattani, later converted to Islam, and married a woman of royal blood, a relative of the Raja of Pattani. Very close to and trusted by the Raja, he was appointed chief of the Duty and Tax Collections Department.

How should we understand the existence of this Muslim Chinese? It seems appropriate to find here evidence of Chinese assimilation into Thai society. But it may also be possible to interpret it as evidence of maintaining or even asserting Chineseness through utilizing and appropriating a local context. Relying on the Thai cultural context makes this reading possible. Of course, it may mean both. We would like to suggest that any theory that implies a shift in one direction or another may not be sufficient to explain what we see. Here Chinese elements and Thai elements co-exist while being maintained and accumulated and interacting with each other.

©"Emergence of New Types of Regionalization in East Asia" by Urata Shujiro, September 25, 2003.

East Asia had not been active in establishing regional institutions such as free trade areas (FTAs) and customs unions until the late 1990s. Toward the end of the 1990s many East Asian countries started to show a strong interest in FTAs and other types of regional cooperation. One factor behind the newly emerging trend was the financial crisis in East Asia, which had serious impacts on East Asian countries. In addition, the increasing number of FTAs in other parts of the world and the failure of the WTO process made East Asian countries become interested in FTAs. FTAs are likely to contribute to economic growth in East Asia as they provide greater access to FTA partners' markets and promote domestic deregulation. Despite these favorable impacts of FTAs on East Asian economies, strong opposition from potentially impacted or non-competitive sectors are slowing down the process of FTAs. To overcome such opposition and establish FTAs, political leaders have to show strong leadership. Among East Asian countries, Japan must take the initiative in establishing FTAs, as they would provide substantial benefits to Japan, which has been suffering from a long recession, through increasing linkage with fast growing economies in East Asia.

新型肺炎 SARS と私

吉田 弥太郎



日本中の医療関係者にとって、今年の上半期の最大の話題は新型肺炎（重症急性呼吸器症候群 SARS）であった。最も身近な懸念は、もし新型肺炎が日本に上陸し患者が病院を訪れたとき、如何にして病院の職員と他の患者を感染から守るかであった。私はセンターでアジアのことと

人間環境とを学んでいたもので、アジアで多発した新型肺炎には格別の関心をもって見守った。情報が混乱した時期には旅行業などパニック状態だったし、私の予定した会合にキャンセルも出た。

市場原理が最優先で罷り通る国際化には賛同しかねるが、交通の発達で感染が拡大したのは紛れもない事実である。インターネットの時代にも拘わらず、広東省などで昨秋に新型肺炎らしい病気が発生しながら報道されなかったことは、痛恨の極みとしか言いようがない。一方、エイズでは原因ウイルス確定に2年もかかったのに対して、新型肺炎でのウイルス学的な研究はいち早く成果を納めた。WHOが史上初めて感染症に対する国際警告を発し、その僅か2週間後に世界で3つのチームが原因ウイルスを同定し、その後のサルでの感染実験でこのウイルスの関与が確認された。環境論から見てやはり野生動物を珍重する中国の食文化が気になる。ハクビシン（麝香猫）やタヌキに類似ウイ

東風南信 REFLECTIONS

カンボディアの大学で ライブラリー・アドバイザーになる

北野 康子

JICAのシニア海外ボランティアとして、1年9カ月間立農業大学で仕事をした。日本万国博覧会記念協会が建物だけを寄贈した図書館は、学部の図書と雑誌を集めて2001年に開館した。分類されている図書は一部だった。鉄製と木製の書架は重さで傾き、書庫の端の床には、黴の生えたロシア語の図書と、寄贈の雑誌が積み重ねてあった。使われていない部屋がいくつもあった。

新しい配置図と資料の移動を提案した。英語とフランス語の図書を一部屋に、もう一部屋を学生の卒業論文の部屋にしようとした。寄贈の雑誌、ロシア語、百科事典と辞書等は、全てそれぞれの部屋に集めることにした。学長は書架の大きさや配置まで決め、どこからか財源を見つけてきた。新しい書架と、閲覧用のテーブルと椅子が運ばれ、ファンも取り付けられた。一週間ほど5、6人のエキストラがキャンパスの近くからリクルートされたが、昼からは皆どこかへ居なくなった。栄養失調気味の母子もいた。手、腕、肩、頭と紐の他に運搬用の道具は皆無。ついにひと月も閉館することになった。図書と雑誌の区別をして運ばせ、並べた。図書や雑誌の購入予算など無かったから、雑誌と図書の区別も分からなかった。Natureや、American Scientistのバックナンバーを纏めた。Britannicaや、Americanaも埋もれていた。

職員の家庭の事情などが分かるようになったある日、精米所を見学する機会があった。ふくよかな華僑の社長から、輸出用の上等の米を5キロお土産にもらったので、職員5

ルスがあって、動物からヒトへ食物を介して感染したという理論はまだ憶測の域を出ない。しかし野生動物の販売や調理はある程度規制されているらしい。ヒトにこれまで存在しなかった新興感染症の多くは動物を接点にする人獣共通感染症であるという。ただ、これまでもそのような食文化があったのに、新型肺炎は何故今になって起こったのか、ウイルスの変異があったのだろうか、このあたりは釈然としない。

さて8月中旬のデータによれば、新型肺炎は世界各国で約8,500人が感染し、死亡率約10%である。この数字自体は1968年の香港インフルエンザで2カ月で約50万人の死者を出したのに比べて、驚くに値しないという意見もある。しかし臨床医として見逃せない事実が2点ある。ひとつは医療従事者に驚異的に高い発症率があること、いまひとつは少数の発症者が接触した多数のヒトに感染させていることである。このような患者をsuperspreaderと言っているが、中国語では「毒王」と呼ぶらしい。多分、この2点は相互に関連するのであろう。WHOの感染症専門家が感染し死亡しているし、カナダでも病院勤務者の感染が報じられている。初期情報が迅速に公開されたならば、対策も早期に強化でき、このような犠牲者は減らせたであろう。

ウイルスが分かってもワクチンの開発はまだ時間がかかる。今のところは感染者の隔離と検疫という古典的な封じ込め作戦で成功したかに見えるが、冬の感冒多発シーズンにどうか新型肺炎が再び地上に出てこないよう、祈るのみである。（1996～1999東南アジア研究センター教授。現在医仁会武田総合病院院長代理）



2003年4月3日卒業式で
副首相から勲章を授与される

人にお裾わけをした。子供一人につき、ワンカップにした。5人の子持ちの女性は、夫がセカンド・ワイフに貢ぎ、警官の職も辞めたので、朝も食わずに仕事に来ていた。午前中だけ仕事をする女性には、ワンカップあげた。彼女は、ボル・ポト以前には家族が居たようである。その日、彼女の仕事部屋で大きな電気釜を見た。電気代を節約するためらしい、内緒にしてくれと言う。またある日、眼鏡を無くしたので50ドルくれと言われて驚いた。館長の所にも無心に行ったが、この間バイクを買ったのではないかと断わられたそうである。

一カ月後、新しい書庫と閲覧室は見違えるようになり、利用者も増加した。寄贈図書だけの1万冊くらいの洋書にはカード目録すら無く、検索の手段が無い。JICAにコンピュータを買ってもらったので、分類表などを整備し、目録規則を教えなければならぬ。クメール正月前の最も暑い季節に気管支炎になった私は、赤い着物を着た仏様に、ゴホン、ゴホンと水を掛けながら、これからやらなければならない仕事、データベースの構築のことを考えていた。（1977～2001東南アジア研究センター助手・図書室主任。写真は、卒業式の日、カンボディア副首相から「サハメトレイ（協力・友好）勲章」を受ける北野康子さん）

WHAT CAN THAILAND LEARN FROM THE JAPANESE LABOR MARKET?

By Srawooth Paitoonpong



I had a hard time explaining to friends back home what I intended to do at CSEAS. I told them I would write a book on the labor market of Thailand and what we can learn from the Japanese labor market.

"Japan is much more advanced."

"I know."

"Japan is much different: its people, culture, geography, economy, etc., etc."

"I know that, too."

I told them that was why we should take a good look at Japan, with a view to becoming more developed than we are now.

Except for kick boxing—which seems the only Thai know-how recognized by at least a small group of Japanese—Thailand is really far behind Japan, particularly in economic and technological development. In 2000, the GNP per capita of Japan was US\$ 42,783, 16 times higher than Thailand's US\$ 2,656. Against this income gap, Japan has a population of 127.9 million, about twice that of Thailand's 62.2 million, with a total land area of 378 square kilometers, compared to Thailand's 513 square kilometers. The proportion of population aged 65 and older is 17 percent in Japan and only 5 percent in Thailand, reflecting the greater longevity of the Japanese people, whose life expectancy at birth is 77 for men and 83.8 for women. Life expectancy at birth in Thailand is 66.7 for men and 72.6 for women.

Labor force participation is lower in Japan than in Thailand, 73.3 percent compared to 84.0 percent. The difference comes mainly from the higher participation rate of women in Thailand, 78.1 percent, about 17 percentage points higher than Japan's. However, the total number employed is 64.5 million in Japan and only 33 million in Thailand. And while almost half of Thailand's employment is still in agriculture (48.8 percent), only 3.3 percent of Japanese employment is in agriculture; the majority is in the service sector (76.9 percent). The unemployment rate is higher in Japan, 4.7 percent, compared to 2.4 percent in Thailand. The lower unemployment rate in Thailand deserves explanation; it may be related

to the common phenomenon of underemployment. But as we have heard that Japanese unemployment has usually been low, it is interesting to see the changes occurring in the Japanese economy. The Japanese are known for working long hours—although the official working hours are about 40 hours per week. However, the number of working hours per month in Japanese companies with over 5 employees has been declining since 1990 from around 182 hours to 166.5 hours for men, and from around 155 hours to 136.4 for women.

What can we learn from Japan's labor market? A lot! By and large, it is interesting to study the labor market of Japan for several reasons: first, Japan has experienced dynamic movement in her economy; second, Japan has several institutional particularities—including the *nenko* (seniority) system, life-long employment, enterprise unionism, *shunto* (spring offensive) system, decentralized wage bargaining, and the co-operative employer-employee relationship—which are likely to affect the determination of wages and employment; and third, Japan has a good collection of labor data.

A Japanese labor economist (Seike 1997) noted that the Japanese employment system has often been described as having "three sacred treasures." These are the long-term guarantee of jobs (lifetime employment), the granting of wage hikes and promotions in line with age and years of continuous service (the seniority system), and the organization of labor unions separately at each corporation (the enterprise-based union). It has also been noted that innovative human resource management is responsible for the development of competitive industrial sectors, and that the inner flexibility of the labor market has produced low unemployment and wage flexibility. Particularly before the bursting of the economic bubble in the early 1990s, the Japanese labor market emerged from the two oil shocks of the 1970s with a remarkably low unemployment rate, partly because of its allegedly flexible wage system. Furthermore, Japanese human resource management practices were considered a key comparative advantage in the remarkable performance of many export-oriented Japanese industries. But recent experience poses a question for the Japanese way of handling the labor market: will it survive the prolonged economic slowdown as well as the rapid ageing of the Japanese labor force?

Revisionist views of the 1980s argued that lifetime employment, *nenko* wages, and enterprise unions are not unique to Japan. Whether that view is accepted or not, it is certain that these distinct

features of the Japanese labor market are changing. Three major changes are being envisaged—one is demographic change, or the swelling ranks of senior citizens and thinning ranks of young people; second is change in the competitive environment at the domestic and international levels, which has implications for seniority, wages, and the evaluation and training system; and third is a shift in the value system or attitude of individuals, which has implications for lifetime employment and the seniority system, among others.

There are two more supporting facts which make the Japanese experience applicable to Thailand. Thailand's economic process is following the pattern of Japan's in terms of economic boom and bust, and the Thai labor force is also ageing. Although the pace of Thailand's demographic change is slower than that of Japan and Thailand's stage of development is still very far behind Japan's, lessons learned here can be indicative for Thailand's sustainable development and stable labor market. As Thailand is following a similar pattern of demographic transition resulting in an increasing proportion of elderly, the pros and cons of declining population growth rate in Japan could be a very valuable policy lesson for Thailand. Also, of particular interest is how the Japanese labor market copes with the economic slowdown of the last decade.

(Visiting Research Fellow)

AGRICULTURAL EVOLUTION THROUGH INTEGRATED PEST MANAGEMENT?

By Yunita T. Winarto



The Integrated Pest Management (IPM) program produced a significant change in the farming culture of Indonesia where it was introduced in the 1990s. The program aimed to shift farmers' paradigm from growing food crops "with pesticides"

into growing a "healthy crop" on the basis of an agro-ecosystem analysis. Not only has a prominent change in knowledge and strategies occurred among IPM farmers, but farmers' empowerment in decision-making and self-governance has also been seen. "Farmers' science" (*sains petani*) has been developed elsewhere on the basis of their own needs and problems. Even though the formation of an "IPM culture" among various farming communities is still underway, there is an indication of an evolutionary change within farmers' knowledge and practices. On the other hand, some internal and external constraints affected farmers' efforts in implementing

and disseminating the new farming knowledge and strategies.

The introduction of similar programs in other Asian countries, including Cambodia and Vietnam in the 1990s, has led to similar results, i.e. enhancing farmers' knowledge and improving farming practices. However, different agricultural conditions, policies, and cultures may—to some extent—have led to differences in the ways the program was implemented on the advance the farmers experienced. My work in those three countries (Indonesia, Cambodia, and Vietnam) reveals that similar significant changes do occur in Cambodia and Vietnam in the formation of new interpretation schemas, by incorporating new elements introduced through the IPM Farmer Field School and by combining those new elements to form new interpretation schemas. Examples are the prey-predators categories, their dynamic relationship, and seeing chemical pesticides as poisons that kill natural enemies, the "farmers' friends and helpers." The new interpretation schemas also become the basis for action that produces changes in farmers' practices.

Differences are found in the stage of agricultural growth in each country at the time the IPM was introduced and in the adjustment of the program to the existing practices and problems. Farmers in Indonesia learned more about pest and disease management rather than the entire cropping system due to the very intensive and injudicious use of pesticides there, while farmers in Cambodia and Vietnam learned more about improving crop cultivation to increase yields through changing their transplanting, fertilizing, and soil management practices.

Farmers' empowerment was the main objective of the program in all three countries. However, the formation of farmers' organizations, movements, and civil society is further advanced in Indonesia than in Cambodia and Vietnam, which experienced the introduction of Community IPM at a later stage. The formation of farmers' organizations for IPM alumni has been implemented in Cambodia and Vietnam, but is still in an early stage and has not reached many farming communities.

One factor that needs to be taken into account in following IPM's further progress is the differing political circumstances in Cambodia and Vietnam. Cambodia is now implementing decentralization assisted by various international/national donor agencies within the context of a "less tight social structure" at the community level than the community social structure in Vietnam. Even though Vietnam's government has provided greater autonomy to the farming households, the agricultural cooperatives and local authorities at the commune level still play a significant role in decision making

in commune affairs and problems. It is interesting, therefore, to examine the extent to which empowerment as the underlining paradigm of this program will take place in different countries in Southeast Asia in the future. Yet I strongly argue that agricultural evolution in this region is underway through the Integrated Pest Management program.

(Visiting Research Fellow)

RURAL POVERTY IN MYANMAR

By Cho Cho San



The incidence of poverty in Myanmar is higher than in Southeast Asian countries such as Indonesia, Malaysia, and Thailand. These countries were relatively flexible in adjusting their policies to the goals of development and poverty allevia-

tion. In 1995 the International Fund for Agricultural Development (IFAD) listed Myanmar as one of the countries with "moderate levels of poverty." Between 25 and 50 percent of the rural population live below the World Bank's designated poverty line of less than US\$1 per day.

Although Myanmar has followed a market-oriented economic policy since 1989, the state is still the sole owner of all cultivated land. As a result, land utilization is undeveloped and 7,311,000 ha of cultivable land lay unused in 1999-2000. The majority of rural people living a substandard life are landless agricultural workers and small farmers. Nearly 42 percent of rural households have cultivation rights to less than 3 acres of land and remain below the poverty line. The assetless rural poor are heavily dependent on non-farm income and are unable to afford education, health, and other social obligations. It is essential to open up opportunity for land reclamation in favor of the poor through a conscious policy that enables them to cultivate land.

Moreover, women from poor rural households have a higher labor burden which includes reproductive activities and household chores such as cooking, washing, fetching water, feeding animals, child and elderly care, and family health care. Rural women are engaged throughout the day in household chores and farm work as well as other income-generating activities. Women are usually poorer than men in access to education and health, and at a disadvantage in participation in the labor force. The sources of deprivation of the female poor are predominantly economic and sociocultural. It is essential to find out how the female poor suffer from the twin disadvantages of poverty and discrimination.

Achievements in rural infrastructure, such as transportation and communication, were not impressive during the 1980s and 1990s. National investment in agricultural research has declined since the late 1980s. In 1991-92, the Ministry of Agriculture and Irrigation initiated an Integrated Rural Development Pilot Program in one village in each of the three major divisions of Yangon, Bago, and Mandalay. Under this program, technical advice, training, education, information, and linkage support are provided to relevant local and regional agencies. This program is said to embrace free competition in all respects in line with the government's market economy policies. However, many things remain to be done to accomplish rural development and poverty eradication in Myanmar. With financial and technical assistance provided by foreign nations, Myanmar will surely reach its goal after overcoming obstacles currently in its path to success.

(Visiting Research Fellow)

THE INSTITUTE OF ECOLOGY AND BIOLOGICAL RESOURCES

By Dao Trong Hung



The Institute of Ecology and Biological Resources (IEBR) is a government institution belonging to Vietnam's National Center for Natural Science and Technology (NCST). The Institute was founded by the decision of the Council of Ministers (HDBT 65/CT) on 5 March 1990. Its function is to study biological resources and typical ecosystems in order to supply the needs of the population in food, food-stuffs, and consumer goods; to recommend planning activities for socio-economic development and environmental protection; and to educate and train scientists in ecology and biological resources.

The major scientific objectives of IEBR are:

- To study the flora and fauna of Vietnam;
- To inventory and evaluate biological resources in order to provide a basis for the rational utilization of economic species and the conservation of biodiversity;
- To undertake research on the structure and function of typical ecosystems in Vietnam for the monitoring and management of natural resources and their environment;
- To work on environmental restoration and the design and planning of sustainable development from an environmental perspective;
- To train scientists in the field of ecology and biological resources.

In recent times, IEBR has led and taken part in national and Institute programs. It has carried out surveys and inventories of biological resources in different regions of Vietnam. The surveys assessed the current distribution, density, and status of species with high scientific and economic value such as ginseng, cardamom, pine, hardwood, gibbons, snub-nosed monkey, rhinoceros, wild oxen, pheasant, peacocks, and fresh water crocodiles. The results provide the basis for recommendations on rational utilization, restoration, and protection of these precious resources. The results can then be used in feasibility studies of nature reserves and national parks in Vietnam.

The research also deals with aquatic ecosystems of the coastal littoral areas of North Vietnam. It pays special attention to aquatic resources such as molluscs and crustaceans (such as shrimps and shellfish) and monitors cyclical processes and ecological energetics for the rational and optimal utilization of these ecosystems. The resultant data on soil, water, humidity, acidity, salinity, vegetation characteristics, and bio-aquatic resources help to assign models for the optimal utilization of coastal areas and brackish water bodies. The proposed model of landscape ecological planning has been accepted by local authorities.

Recently, the Institute has undergone a change in thinking and research procedures. All investigations are divided so as to serve defined, concrete needs. For example, some Institute scientists are studying the selection and multiplication of the best seed from essential oil producing plants such as mint, vetiver, basil, lemongrass, and other medicinal plants such as *Aralia*, *Artemisia*, etc. All their efforts are aimed at the effective exploitation, acclimatization, and production of these plants.

The choice of plants to be cultivated on bare hills and other vacant areas of land is an important part of the Institute's research program. Plants such as vetiver, cashew, and agave have been selected for this purpose. The results of this research have helped in the amelioration and reforestation of denuded land in the interior of Vietnam.

With respect to zoological resources, scientists from the Institute have succeeded in carrying out selection on good animal breeds for livestock grazing, particularly endangered species and those of high economic value such as sika deer, gaur, etc. and in building breeding stations in Eakao, Dalat, Suoi Hai, the Hanoi Zoo, and Son La and Vinh Phuc provinces.

Special attention is paid to the development of strategies for the prevention of, and protection from, livestock diseases and plant pests, with a view to preserving an ecological balance and maintaining an

unpolluted environment.

At present, the Institute is developing efforts for monitoring and management of the environment. Research has been carried out to determine aquatic indices, which are used to predict changes in water quality in larger water bodies and in the coastal littoral areas. Bioindicators are used for assessing and forecasting the aquatic environment situation. Besides active research, the Institute conducts training courses leading to qualification at the masters and doctoral levels and other post-graduate research.

The results of fundamental research in the Institute have been and will continue to be published in the *Flora and Fauna of Vietnam* (an enumeration of Tay Nguyen plants and wild vegetables) and in the following books: *Conspectus of the Flora of Vietnam*, *The Fauna of Vietnam*, the *Red Data Book of Vietnam*, and the *Handbook of Economic Plants of Vietnam*.

The IEBR works in co-operation with international institutions such as the Institute of Evolutionary Morphology and Ecology of Animal (Moscow), the Institute of Botany and Zoology (St. Petersburg), the Russian Academy of Science, the Museum of Natural History (Hungary), the Institute of Zoology (Poland), the Museum of Natural History in Paris (France), the Missouri Botanical Gardens and the American Museum of Natural History in New York (USA), the Frankfurt Zoological Society (Germany), and other international organizations such as UNDP, UNESCO, IUCN, WWF, FFI, Birdlife International, and International OXFAM.

For those who are interested in IEBR, my email address is dthung@bdvn.vnd.net.

(Visiting Research Fellow)

RIZAL IN JAPAN

By Ambeth R. Ocampo



My six-month fellowship in the Center for Southeast Asian Studies was enriching both on a professional and personal level. I was nine years old when I made the first of four trips to Japan, and it struck me that I have come full circle because my first trip was during Expo 70 in Osaka. While doing my annotations on the novels of the Philippine National Hero Jose Rizal (1861–96), I would read and re-read the diary and letters he wrote during a short visit to Japan in the spring of 1888, having left Manila to escape persecution from Spanish authorities who found his first novel, *Noli me tangere* (published in Berlin 1887), subversive. It's a pity Rizal didn't leave

us with any impressions of Kyoto because it would have been fascinating to follow his footsteps—as other historians have done here in Japan—in search of a Japanese woman he loved. Depending on the book you are reading she is either O-Sei-san or Usui Seiko.

Writing to his family in the Philippines, Rizal said Japanese lived "in odd-looking houses, like the little houses or cages of rabbits, very clean, with paper walls, white mats on the floor, lattices, etc. etc. They make no noise; loud voices are not heard; they sit quietly in their stores." Cycling around Kyoto today I also noticed the same thing; it's so quiet, and in residential areas nobody seems to be in the streets.

Walking around Sanjo I would sit and watch people, noticing the dyed blond hair popular among Japanese women who have the habit of putting on their make-up in public. In contrast, Filipina women try to hide under a small compact but here Japanese have mirrors as large as their faces that come in a bag with enough cosmetics to stock a neighborhood beauty parlor. In 1888, Rizal described Japanese women as, "short, stout, fair and their cheeks are red. Their hair is stiffer and thicker than ours, and I have seen few with good teeth. There are some who have big eyes."

In another letter Rizal has more to say about Japanese women: "The old attire of Japanese women was and is very pretty, but now they want to introduce here among themselves the not-too-comfortable European dress, in spite of the fact that Japanese women are even smaller than Filipino women. Thank God, the common women are still dressed in the old style, but the rich ones who are dressed in European style have a sorry look. Certainly, it is fitting that Japanese women wear European shoes instead of the ugly and uncomfortable Japanese footwear. European shoes can harmonize perfectly with the Japanese dress."

One can only wonder why the women are described more than the men. In his letters from Tokyo in March 1888 Rizal had only one sentence to describe men. He observed that Japanese who wore European outfits resembled people in Binan, Laguna. I guess this is a private joke. He also wrote: "I have stayed here longer than I intended, for the country seems to me very interesting and because in the future we shall have much to do and deal with Japan. [How very prophetic indeed]. I'm learning Japanese: I can make myself understood in it, and though badly, I can express what I want in it. I have traveled on foot and by train and also by jinrikisha until Utsunomiya, Nikko, Kodzu, Odawara, Tonosawa, Mimoto, Miyanoshita, Oshihama, Kamakura, Todsuka, etc. Flowers are blooming on the tree

branches, camellias are reddening the green foliage of the gardens, the plum and cherry are beginning to give a white or vaporous rose tint to the landscape shaded by the dark pines and gigantic cryptomeria. The temples are located in these beautiful places and for the believers entrance into such garden must cause a certain impression that ought to predispose them to retirement and meditation."

These writings and a small rice paper notebook, filled with drawings, notes, and doodles forming a visual record of his trip are all I have, and yet with these I travel back through time and see Japan through the eyes of the Philippine National Hero.

(Visiting Research Fellow)

ORGANIZATION, STORAGE, AND RETRIEVAL OF THE CSEAS SPECIAL COLLECTIONS

By Salvacion Manuel-Arlante



In my work at the University of the Philippines Diliman, the flagship campus, as head of an academic library system consisting of Main Library and 27 college/unit libraries, I have always admired and adhered to the Japanese principle of *kaizen*.

This is the principle of ongoing improvement or the "innovative management method," which means improvement involving everyone from managers to workers. A prerequisite to further improvement is the observance of the basic rules of good housekeeping and discipline associated with five Japanese ideograms known as the 5S: *seiri* (organization or sorting), *seiton* (systematizing), *seiso* (cleaning or neatness), *seiketsu* (standardization) and *shitsuke* (discipline or keep the rule). However, I have often wondered how consistent the Japanese way is. This is one of the chief reasons that triggered my interest to apply for a fellowship grant for a longer stay in Japan.

I am happy to be a recipient of a research fellowship in Kyoto here at CSEAS. Information sources have been acquired and developed by CSEAS to support its research and teaching functions. The holdings of the CSEAS Library have been enhanced by the acquisition of special collections such as materials on Philippine studies and its vernacular languages. The special collections are rare, unique, out of print, published and unpublished ephemera or fugitive materials. Notable in the special collections in print are those of two Filipino historian writers, namely Ambeth Ocampo and Marcelino Foronda, Jr. Both collections cover varied

subject areas including general works, history, the social sciences, languages, science, the arts, legal materials, studies on Philippine literature, and Philippine literature in English, Spanish, and the vernaculars. There are also materials on religion which include doctrinal and pastoral theology, church history and the religious orders, and devocionarios (prayers).

In another format are the microfilm reels of the Philippine Radical Papers, a collection of documents of militant student, political, and religious organizations advocating political, economic, and social changes during the Marcos administration, specifically the martial law regime. They dwell on the Filipino people's fight against foreign dominion, the establishment, tyranny, or oppression. These include street literature of revolutionary change and underground publications.

It is in this light that I am at CSEAS for the purpose of organizing and providing bibliographic tools for these collections. Organization entails bibliographic description, classification, cataloging, indexing, and abstracting in accordance with international standards. It includes the production of a finding tool or research guide, employing hardware, software, and a database available in and accessible to the Center. It also covers collection storage and maintenance to facilitate reference service. On the whole, this project is geared towards rapid retrieval of information, which will redound to the promotion of scholarship and interest in Philippine and Southeast Asian culture.

(Visiting Research Fellow)

MY MONTHS IN KYOTO

By Rosnah B. Suliman



Japan is a most beautiful country. Hills, mountains, trees, and flowers are the main signs of its attractive geography. This fascinating picture has been printed in my mind since I was in secondary school. Three years ago, on a long trip from the

United States back home to Malaysia, I stopped over at Narita Airport. As we were landing, I remember seeing Mt. Fuji—the most attractive part of Japan—as well as the countryside, plantations, rows of housing, and rivers... the first encounter for any visitor. I remembered school classes in which our instructors described the features of certain countries, including Japan, its topography, industrial development, agricultural lands, and so on.

My dream of seeing this beautiful land came

true when I got the opportunity to come to the Center for Southeast Asian Studies on a fellowship to catalogue Indonesian and Malaysian books. The CSEAS library has a good collection of Indonesian books, especially in literature and languages. I had a chance during my stay here to visit a few other libraries in Kansai and Tokyo. The visit was very successful because I learned new information about the digital library and Japanese traditional bookbinding.

Kyoto is known as the city of 1,000 temples. It represents the historical and architectural values of the Japanese people. Located in the western part of Honshu island, the city is surrounded by mountains, hills, and running valleys. Kyoto was the capital (Heian Kyo) of Japan from 794 until 1868, when the government of imperial restoration was formed and transferred to Tokyo. The Kamo River is a symbol of Kyoto City, running from the district of Kita Ward (Kumogahata and Sajikigatake) and heading south to merge with the Takano River in Demachi. It continues through the eastern side of the city, south to Fushimi Ward where it merges with the Katsura River, to become part of the Yodo River. Many restaurants are located along the bank of the river, serving their guests the variety of Kyoto's delicate cuisines.

Kyoto is known for its abundance of delicious food, which I have been preparing at home, using the weekends to walk all the way down to the market and buy the freshest vegetables and most crunchy fruits. Some people in my neighborhood kindly urged me to get a bicycle instead of walking, but I found it enjoyable, rather than difficult, to walk.

Another great experience in Japan is to take the train. It is a way to learn something about the local people by talking to them or just opening a dialogue. It also gives you a chance to view different landscapes over a short distance. The train system is really fascinating and well organized.

The traditional values of Japan are clearly presented and integrated in their culture and remarkable festivals, so I was lucky to experience the following:

Kukicha and *bancha*: *bancha* is a Japanese green tea. *Kukicha* and *bancha* tea are the same, *kukicha* being the stem and *bancha* the leaf of the plant. Japanese *bancha* tea is a grade that comes from the early summer harvest of just the leaves with no stem or stick. *Sencha* is the most popular type of tea in Japan today. Japanese green tea has a mixture of subtle sweetness and fresh green scent. The color seems to be light green. Japanese *bancha* tea varies widely in both quality and price.

Aoi Festival: This is an annual festival of

Kamowake-ikazuchi Jinja (Kamigamo Shrine) and Kamomioya Jinja (Shimogamo Shrine) which normally held on May 15th each year. It is said to have originated in the fifth year in the reign of Emperor Kimmei (544), when the festival was held to pray for a proper harvest following many lean years of storms and floods.

The Gion Festival: This began in the year 869, when people held a festival in Kyoto to pray for the end of an epidemic which was rampaging through the country. Since then, the festival has developed over a period of more than 1,100 years, despite the many wars which took place in and around Kyoto during this period. The spiritual support of citizens has contributed greatly to the festival's development. It features various events, starting from the Kippuri Festival on July 1 and ending with the Eki-jinja Natsukoshi Festival on July 31. The high point is the Yoiyama Festival on July 16 and the Yamaboko Junko Festival on July 17; during the latter, gorgeously decorated floats are paraded through the streets of Kyoto. These events are watched by a great number of visitors from Japan and abroad.

Daimonji Gozan Okuribi: Held on August 16 of every year, this is a spectacular event. First, the Daimonji bonfire is lit on Mt. Nyoigatake in the Higashiyama mountain range. The bonfire is in the shape of the Chinese character Dai, meaning "large." Then four other bonfire characters, called Myoho (meaning supreme law of Buddha), Funagata, Hidari Daimonji, and Toriigata, are lit one after another to adorn the dark summer-night sky in Kyoto.

I would like to thank you all, administration and staff, who have given me this opportunity. I am grateful for your solid support and constant assistance. I'm glad to have worked in the CSEAS library, one of the best research libraries I have ever seen. And I felt happy to stay in Kyoto, because the people here are kind and very helpful and friendly, regardless of my poor Japanese language and difficulty of communication. I will always remember one incident in particular (a sweet memory): when I was commuting by bus, an old lady offered to share her seat with me... a kind offer because she knew there weren't any other seats left.

(Visiting Research Fellow)

INFORMATION

CALL FOR PAPERS

★ **2nd International Conference on Vietnamese Studies "Vietnam on the Road to Development and Integration: Tradition and Modernity"**

Date: July 14–16, 2004

Place: Thong Nhat Meeting Hall in Ho Chi Minh City, Vietnam

Organizer: National Center for Social Sciences and Humanities of Vietnam (NCSSH) and Vietnam National University

✉ SUBMIT ABSTRACT by 31 December, 2003

Please forward your intention to submit a paper or workshop to:

Conference Organizing Committee, 36 Hang Chuoi Street, Hanoi, Vietnam

Tel +84 4 9719067, fax +84 4 9719071

Email: vietnamstudies@fpt.vn

★ **Burma Studies Conference**

Date: October 22–24, 2004

Place: Center for Burma Studies, Northern Illinois University DeKalb, Illinois, USA

✉ SUBMIT ABSTRACT by 1 March, 2004

Individual paper proposals are invited. All disciplines and topics related to Burma studies are welcome.

Please send an abstract of about 150 words to:

Alexander Green, Program Chair

Art Department, Denison University

Granville, OH 43023 USA

Or via email: greenar@denison.edu

Information will be listed on the Northern Illinois website <http://www.grad.niu.edu/Burma/>.

INVITATION TO BE PANEL COORDINATOR

★ **4th International Symposium of the Journal Antropologi Indonesia "Indonesia in the Changing Global Context: Building Cooperation and Partnership?"**

Date: July 12–15, 2005

Place: Faculty of Social and Political Sciences, University of Indonesia, Depok

✉ SUBMIT PANEL PROPOSAL by 31 January, 2004; ABSTRACT by 15 August, 2004

Please organize panels or submit papers on the basis of your works in a wide range of people's life in Indonesia.

For further inquiries, please contact:

Yunita T. Winarto, Visiting Research Fellow, CSEAS.

Tel 075-753-7363, email: winarto@cseas.kyoto-u.ac.jp

Or Secretariat of the Organizing Committee, University of Indonesia, Depok 16424

Tel/fax +62 21 7881032, email: antrop@centrin.net.id

海外調査だより Fieldnotes

インドネシアにおける住民組織の発展と 制度の変化——1985年からの変容

水野 広祐

今、インドネシア社会は大きな変化を遂げている。スハルト大統領が退陣直後の1998年5月に結社の自由や団結権を承認され、労働者や地域の住民、さらに農民の間にも多数の組織が結成されつつある。これらの新たに生まれる組織は、スハルト政権下のようなトップダウンの組織ではなく、メンバーによるメンバーのための団体を目指している。1998年5月以降、これらの住民組織はどのように生まれ、また活動しているのだろうか。さらに、これらの組織は、同時に実施された民主化や地方分権化への改革とあわせ、インドネシア経済の制度をどう変化させているのだろうか。新たに生まれた労働者組織は、企業との関係を変化させて新しい労使関係を生み出しているのだろうか。あるいは新たに農民や小工業者・商人らによって作られた協同組合は、商品取引や信用取引のインフォーマルな制度をどのように変更させているのだろうか。さらに、新しく住民により選出された議会は、伝統的価値に基づくとして

いた合議・全員一致の制度であるムジャワラー・ムファカットをどう変化させているのであろうか。

また、1980年代半ばより進められてきた構造調整政策は、民主化とともに進められたIMF主導の経済改革により、より幅広くまた徹底して実行されることになった。このような構造調整政策や経済改革は、農村社会にどのような影響を及ぼしているのであろうか。

以上の問題関心から、私は、2003年9月までの在外研究員として与えられた9か月あまりの期間、多くの地点において調査を実行した。1985-86年に農村経済調査を行った、西ジャワの北部平野部およびブリアンガン高地の2カ村において、農家経済や農村工業・商業の調査を実行した。北部平野部の稲作は、1986年時点とは全く様変わりしていた。収穫の終わった圃場は、まるで害虫の飼育場となっており、1986年時点ではヘクタールあたり籾5トンを上回ることも多かった収量は、いまは3トンがやっとであり、1トンを下回ることも多い。郡に一つあった農業普及所は廃止され、水利係の数も大きく削減されていた。一方、今回の期間以前から実施してきた労使関係調査では、労使紛争にも遭遇した。激烈な闘争から大量解雇に至ったケースもあれば、まるでシステムが成長するように、労使関係が整備されたケースにも出会った。以上のような変化を遂げたインドネシア社会を、今後調査結果を論文等にまとめる中で描いてゆきたい。(センター教授)

出版ニュース Reports of Publications

◇『東南アジア研究』41巻1号

Southeast Asian Studies 41(1)

Environmental Consciousness in Southeast and East Asia: Comparative Studies of Public Perceptions of Environmental Problems

Preface. A. Terry Rambo, Aoyagi-Usui Midori, Yok-shiu F. Lee, James E. Nickum, Otsuka Takashi ▼ Methodology and Major Findings of a Comparative Research Project on Environmental Consciousness in Hong Kong (China), Japan, Thailand, and Vietnam. James E. Nickum, A. Terry Rambo ▼ Environmental Consciousness in Hong Kong. Yok-shiu F. Lee ▼ Environmental Consciousness in Japan. James E. Nickum, Aoyagi-Usui Midori, Otsuka Takashi ▼ Environmental Consciousness in Thailand: Contesting Maps of Eco-Conscious Minds. Opart Panya, Solot Sirisai ▼ Environmental Consciousness in Vietnam. Pham Thi Thuong Vi, A. Terry Rambo
Village versus State: The Evolution of State-Local Relations in Vietnam until 1945. Nguyễn Thế Anh
▽書評 (Book Reviews) Michael T. Rock, *Pollution Control in East Asia: Lessons from Newly Industrializing Countries*. 吉原久仁夫 ▼ Resil B. Mojares, *Waiting for Mariang Makiling: Essays in Philippine Cultural History*. Caroline S. Hau ▼ 佐藤 仁著、『稀少資源のポリティクス——タイ農村にみる開発と環境のはざま』藤田 渡▽現地通信 (Field Report) 「ベトナムの変化の中で」柳澤雅之

◇『東南アジア研究』41巻2号

Southeast Asian Studies 41(2)

Global Migrations, Old Forms of Labor, and New Transborder Class Relations. Filomeno V. Aguilar, Jr. ▼ Three-Tiered Social Darwinism in Malaysian Ethnographic History. Keebeng Ooi ▼ Culture, Environment, and Farming Systems in Vietnam's Northern Mountain

Region. Tran Duc Vien ▼ Dealing with Contradictions: Examining National Forest Reserves in Thailand. Fujita Wataru ▼ Shifting Swamp Rice Cultivation with Broadcast Seeding in Insular Southeast Asia: A Survey of Its Distribution and the Natural and Social Factors Influencing Its Use. Ichikawa Masahiro ▼ 書評論文 (Review Article) 「アメリカ『帝国』、『ならず者』国家、イスラム主義」白石 隆

◇地域研究叢書14

■玉田芳史. 2003. 『民主化の虚像と実像——タイ現代政治変動のメカニズム』京都大学学術出版会.

◇研究報告書シリーズ (Research Report Series)

■Hayashi, Yukio; Thongsa Sayavongkhamdy, eds. 2003. *Cultural Diversity and Conservation in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China Regional Dynamics in the Past and Present*. Bangkok: Amarin Printing and Publishing.

■海田能宏編著. 2003. 『バングラデシュ農村開発実践研究——新しい協力関係を求めて』コモンズ.

<センター来訪者>

5月15日 Christian Henriot (フランス国立科学研究センター (CNRS) 所長) ▼ 7月10日 Hedar Laudjeng (パンタヤ財団顧問) ▼ 7月17日 Antonio P. Villamayor (フィリピン総領事)、Dante Ang II (マニラタイムズ副理事長) ▼ 7月22日 Al. Susanto (インドネシア国土地理院 (BAKOSURTANAL) 事務局長) ▼ 7月28日 Semiarto Aji Purwanto (インドネシア大学日本研究センター研究員) ▼ 9月16日 Dede Irving Hartoto (LIPI 研究員)、Linda Wulandari (パラカラヤ大学講師) ▼ 10月2日 Frederic Andres (国立情報学研究所助教授)、小野欽司 (同教授) ▼ 10月3日 Andrew B. Gidamis (AICAD 事務局長) Pascal N. Mdemu (タンザニア科学・技術・高等教育省教育政策計画局長)、John McCarthy (オーストラリア大使) ▼ 10月8日 Yuan Shaofen (广西大学民族研究所所長)、Yu Kang (雲南民族学院民族文化学院助教授)

研究会報告

Report of Seminars

◆ Workshop on "Socio-economic and Political Transitions in Northeastern Thailand"

5月21日 Buapun Promphakping (Khon Kaen University) "Poverty, Inequality and Quality of Life of People in the Northeast of Thailand" ▽ Ratana Tosakul-Boonmathya (Khon Kaen University) "A Narrative of Contested Views of Development in Thai Society: Voices of Villagers in Rural Northeastern Thailand"

5月22日 Somnuek Panyasing (Khon Kaen University) "Estimation of Population Related with Substance Abuse: Northeastern Region"

5月23日 Farung Meeudon (Khon Kaen University) "Gender Role in Local Politics in the Northeast of Thailand" ▽ Apisak Fhaithakam (Khon Kaen University) "Urbanization of Khon Kaen and Its Impact on Culture" ▽ Peerasit Kamnuansilpa (Khon Kaen University) "Management Capability of Tambon Administration Organizations in the Northeast of Thailand"

◆ JCAS・CSEAS・ASAFAS 連携研究「地域連関の構図」研究会 (インドネシア語による報告)

7月10日 Hedar Laudjeng (弁護士) 「森をめぐる権利——ポスト・スハルト期の国家と民族集団」

◆ Special Seminar

5月15日 Dao Trong Hung (センター外国人研究員) "Forest Management and Forest Products Exploitation in the Buffer Zone of the Pu Mat National Park, Nghe An Province, Vietnam"

5月29日 Chalong Soontravanich (同) "Post WWII

Thai Crime Fictions, 1947-1957: From Militarized Banditry to International Spy War and Organized Crime"

6月24日 Lee Hua Seng (同) "Forest Management in Sarawak Malaysia with Special Reference to Rehabilitation Efforts in Deforested Sites"

7月17日 Lamberto R. Ocampo (同) "Jose Rizal: Old Questions, New Answers"

10月27日 Yunita T. Winarto (同) "Agricultural Evolution through Integrated Pest Management? A Comparative Perspective from Indonesia, Cambodia, and Vietnam"

◆ 拠点大学交流プログラム共同研究「国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済」セミナー

9月9日 Yongyuth Chalamwong (Thai Development Research Institute) "Impacts of Converting Land Assets into Working Capital: A Case Study of Thailand"

◆ JSPS Special Seminar

10月10日 Wu Xiao An (Beijing University) "Flows and Interactions: The Saga of an Emigrant Chinese Family" ▽ Dave Lumenta (Research Institute for Institutional Development) "Crossborder Dayak Identities: Cases among Transnational Iban and Kenyah Communities in the Sarawak-Kalimantan Borderlands"

◆ 「東南アジアの社会と文化」研究会

第13回 5月16日 樫永真佐夫 (国立民族学博物館) 「系譜を記すということ——黒タイの家譜を考える」

センター人の動き

P. Abinales (4月23~25日) フィリピン「B. アンダーソン "Imagined Communities" フィリピン版出版に向けての研究打合せ」 ▽ 田中耕司 (4月27~30日) ラオス「ラオス経済政策支援のための研究・調査打合せ」 ▽ 藤田幸一 (同) 同「ラオス経済政策支援フェーズ2のための会議出席」 ▽ 白石隆 (4月28日~5月4日) インドネシア「日・イ政策対話出席」 ▽ 松林公蔵 (5月10~18日) 韓国「韓国地域在住高齢者に関する医学的研究」 ▽ 五十嵐忠孝 (5月11日~6月11日) インドネシア「人類生態学に関する研究資料収集及びジャカルタ連絡事務所管理運営」 ▽ P. Abinales (5月13~28日) アメリカ合衆国「『ロックフェラー財団東南アジアの政治』国際会議出席及び資料収集」 ▽ 阿部茂行 (5月28日~6月1日) タイ「『アセアン・日本: 地域的統合のパートナー』セミナー出席」 ▽ 河野泰之 (6月1~7日) ミャンマー「ミャンマーの農業開発・農村発展に関する調査」 ▽ 藤田幸一 (同) 同「ミャンマー米穀政策改革に関する調査」 ▽ C. Hau (6月8~15日) 中国「東南アジアの『華僑』資料収集・現地調査」 ▽ 白石隆 (6月8~19日) インドネシア「インドネシア政治データ収集及びジャカルタ

連絡事務所管理運営」 ▽ 同 (6月27日~7月13日) 同「同」 ▽ 西淵光昭 (7月6~12日) イタリア「FAO/WHO 主権ドラフトグループ会議出席・ドラフト作成」 ▽ 藤田幸一 (7月12~27日) ラオス「ラオス農村金融に関する調査」 ▽ 阿部茂行 (7月12~29日) タイ「『国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済』に関する調査研究」 ▽ 河野泰之 (7月16~24日) タイ・ラオス「東南アジア大陸部農村の生業・環境関連の資料収集」 ▽ 濱下武志 (7月17~20日) 台湾「中央研究院における中国社会環境プロジェクト検討会参加」 ▽ P. Abinales (7月19~31日) タイ「『中産階級の研究』のためのタマサート大学、チュラロンコン大学等訪問・資料収集」 ▽ 白石隆 (7月20日~9月7日) インドネシア「インドネシア政治データ収集及びジャカルタ連絡事務所管理運営」 ▽ C. Hau (7月23日~8月1日) インドネシア「『東アジアの地域化と中産階級: アメリカ化と中国化・日本化』の資料収集・現地調査」 ▽ T. Rambo (7月23日~8月11日) タイ「バンコク連絡事務所にて共同研究打合せ・コンケン大学にて共同研究活動」 ▽ 山田勇 (7月25日~8月24日) 中国「環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源変容の地域間比較研究」 ▽ 濱下武志 (7月28日~8月9日) タイ・マレーシア「バンコクにおける華人社会調査及び資料収集、ベナンにおけるマラヤ史会議参加」 ▽ P. Abinales (8月2日~9月

▽ 第14回 9月19日 陳天璽「華商のネットワークとアイデンティティ」

◆東南アジア自然系・社会系合同ゼミ

第1回 5月28日 Nathan Badenoch (ASAFAS) 「北タイの多民族小流域におけるインフォーマル社会ネットワーク——研究の背景とアプローチ」▽百瀬邦泰 (ASAFAS) 「一斉開花現象を巡って——至近要因、究極要因、生活や自然観への影響、保全についての諸問題」

◆「東南アジアの自然と農業」研究会

第111回例会：6月27日 藤田弥生 (総合地球環境学研究所) 「国立森林保護地域における土地利用の変化と土地所有制度に関する考察」

第112回例会：10月17日 梅崎昌裕 (東京医科歯科大学) 「パプアニューギニア高地におけるサツマイモ耕作の変容」

◆「南アジア経済研究会」8月1日

宇佐美好文 (大阪府立大学) 「グローバル市場経済下のデカン高原半乾燥地域農村」▽Umetsu Chieko (Research Institute for Humanity and Nature) "The Role of Farmers' Collective Action for Mitigating Water Scarcity: The Case of Tank Irrigation in Tamil Nadu, India"

◆「農業経済と地域研究」研究会 8月11日

Ramesh Chand (University of Delhi) "Food Policy and Food Security in India during the Reforms"▽Sugimoto Daizo (Kyoto Prefectural University) "Trade Liberalization and Agrarian Structure in India"

◆「東南アジアの『古い』科研ワーク」10月7日

テーマ：「東南アジアにおけるセーフティ・ネットの比較研究——『古い』の問題を中心として」科研：インドネシ

ア調査に関するワークショップ

松林公蔵 (センター)、水野広祐 (同)、Ekawati Wahyuni (Bogor Agricultural University)

◆Special Seminar of "State, Market and Community Study Group"

10月14日 Ikrar Nusa Bhakti (Research Center for Politics, LIPI) "Impediments to Internal Military Reform in Indonesia"

10月31日 Haning Romdiati (Research Center for Population, LIPI) "Indonesian Migrant Workers in Japan"

◆API Seminar 10月17日

Araki Tetsuya (Nihon University) "Putting the First Last: Networking NGOs in Indonesia"▽Wimonart Issarathumnoon (Chulalongkorn University) "Kyoto with Her Townspeople"▽Hui Seng Kin (SUARAM, Malaysia) "Civil Society in Dam Decision-making in Japan: An Observation"▽Joyce Lim Suan Li (Choreographer, Malaysia) "On the Development of Contemporary Dance in the Philippines and Indonesia"▽Nagai Fumio (Osaka City University) "Transformation of Political Structure in Decentralization in Thailand: The Case of the Hangchat District, Lampang Province, Thailand"▽Rachel Pastores Corro (Integrated Bar of the Philippines) "The Impact of Globalization to Migrant Workers in Japan in the Areas of Employment and Labor Standards: An Analysis of Migration Policies, Strategies and Approaches"▽Nareerat Leelawat (Thammasat University) "Negotiating of Identity in 'Manga'"▽Kataoka Tatsuki (Kyushu University) "Changing Identities of the Hill Tribes in Contemporary Thailand: My Research Activities in Thailand"

▽ 10日) フィリピン「ウォーラシア地域における密輸に関する調査・資料収集」▽石川登 (8月11~31日) シンガポール・マレーシア・タイ「『東南アジアにおける社会的流動』に関する研究打合せと資料収集」▽田中耕司 (8月16~20日) ラオス「ラオス経済政策支援のための合同委員会出席」▽藤田幸一 (8月16~29日) 同「ラオスにおける農村金融調査」▽C. Hau (8月18~22日) シンガポール「『International Conference on Asian Studies 3』会議出席」▽林行夫 (8月25日~9月22日) タイ・カンボジア「『カンボジア、タイの仏教サンガ機構の変容』に関する調査・資料収集」▽C. Hau (9月1日~2004年1月31日) インドネシア「ジャカルタ連絡事務所管理運営」▽山田勇 (9月4~28日) フランス・ドイツ「モノと場の資源保全の地域間比較」▽西淵光昭 (9月5~12日) マレーシア「感染症とソーシャル・セーフティ・ネットに関する資料収集」▽速水洋子 (9月7~22日) タイ「『山地民の伝統的知識を生かした熱帯山地林の生態的な修復』に関する調査」▽藤田幸一 (9月8~21日) ミャンマー「ミャンマーにおける農村及び都市インフォーマル・セクターの就業実態調査」▽河野泰之 (9月9~20日) ラオス・タイ「ラオスとタイにおける森林・農業複合に関する調査研究」▽白石隆 (9月19~30日) インドネシア「日イ政策討論出席」▽P. Abinales (9月21~27日) フィリピン「『ARMM ガバナンス支援プロジェクト』協力枠

組み形成に向けての協議及び情報収集」▽藤田幸一 (9月21~28日) インドネシア「インドネシアにおける農村社会構造の実態調査」▽五十嵐忠孝 (9月24日~10月13日) インドネシア「在来暦法に関する調査」▽西淵光昭 (9月25~27日) 中国「食品の衛生検査技術に関する調査」▽濱下武志 (9月26~28日) 韓国「日韓歴史家会議運営委員会参加」▽阿部茂行 (9月26日~10月7日) タイ・シンガポール「『国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済』に関する調査・打合せ」▽白石隆 (10月4~13日) インドネシア「インドネシア地方エリート・データ収集」▽西淵光昭 (10月7~12日) アメリカ合衆国「日米医学コレラ・腸管感染症会議出席、発表、情報収集」▽阿部茂行 (10月8~11日) 韓国「『第6回アジア経済専門委員会』出席」▽山田勇 (10月9日~11月9日) イラン「環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源利用の変容過程調査」▽松林公蔵 (10月13~25日) ミャンマー「ミャンマー高齢者医学調査」▽阿部茂行 (10月15~20日) アメリカ合衆国「Asia's New Regionalism: ASEAN+3に関する国際会議出席」▽北村由美 (10月18~27日) ブルネイ・マレーシア「東南アジア図書館人会議出席及び情報収集」▽林行夫 (10月20~30日) タイ「『タイ国の宗教行政の現状』に関する調査・資料収集」▽松林公蔵 (10月28日~11月28日) ベトナム「ベトナム高齢者に関する医学調査」

柳澤 雅之

人様の話で大変恐縮だが、昨年、大阪大学がタイのマヒドン大学（マ大）と共同して、東南アジアバイオテクノロジー共同研究拠点をバンコクのマ大構内に立ち上げた。阪大側からは教官が1人常駐するほか、数カ月単位の短期駐在者がバンコクを訪問する。これらのスタッフのための研究室がマ大に設置されている。共同研究拠点設立の研究面での目的は、まず、バイオ関連の高価な分析機器をマ大内に設置することで、マ大の研究者や学生、タイ国内のバイオ関連企業がこれらの分析機器の利用が可能であることがあげられる。さらに、インドネシアやベトナムなど、タイ周辺諸国の研究者にも施設利用を促し、研究者間・地域間で研究成果を共有することができる。タイ国内および周辺諸国の研究者や学生にとっては、わざわざ日本にまで行かずとも、バンコクで日本と同様の研修を受けることができる。阪大側のメリットもこの点に関連する。さまざまな遺伝資源に対する各国の権利意識が高まると、これまでのように日本に資料を持ち帰って分析することが困難となる。現地で分析し、現地の研究者と研究成果を共有することは、有用資源を利用した研究にとっては欠かせない。教育面では、日本側の大学院生が現地で資料の採取から実験までを行うことができる。現地の大学院生にとっては、インターネットを通じたサイバー講義によって、日本側の教官の英語講義を現地で聴講することができる。通信速度の関係で、画像情報はパワーポイントで作成された図を表示するだけだが、教官との質疑応答が可能である。これは、講義だけでなく、研究会、ゼミ、分析成果のディスカッション、論文指導など、アイデア次第で活用方法はいくらかでも広がっていくだろう。

京都大学では、情報学研究科が昨年、エネルギー科学研究科・エネルギー理工学研究所が今年、バンコクにオフィスを開設した。ASAFASでも、東南アジア大陸部ではヤンゴンとビエンチャンだが、フィールドステーションの立ち上げが進行中である。学内の諸部局によるこのような様々な拠点を将来どのように連携していくかがこれからの課題となろう。東南アジア研究センターの中期目標・中期計画にはバンコク連絡事務所を全学レベルの共同利用施設、すなわちバンコクセンターとして一層の発展・活用を図ることが明記された。しかし、京大の共同利用事務所は阪大と異なり、複数の学部がタイ側の複数の研究機関と共同利用するため、多目的な事務所であることが求められる。現時点で共同利用可能な点としては、会議・講義室とプレゼンテーション用機器の利用、高速インターネット環境の整備、図書・地図・統計資料の利用とそれらの継続的購入、フィールドワーク用車両の整備、京大関連情報の発信と現地情報の収集、一元化した事務処理などがあげられる。新たなバンコク連絡事務所前夜である。

(センター助手)

Caroline S. Hau

Warm greetings from the "mother-city" of Indonesia! It has been a little over a month since I took over the management of the Center's liaison office. Having never been to Indonesia, and having never been in charge of an office before, I look upon my five-month sojourn in Jakarta as an educational experience.

This means learning to cope with the "small emergencies" that occur while maintaining and upgrading the liaison office facilities with the help of our competent and efficient staff. Since the liaison office also doubles as a way station and meeting place for Center, ASAFAS, and other Japanese scholars and students working on or passing through Indonesia, I have had occasions to sit down with, and talk to, some of our colleagues when they stop by the office. I have also invited Indonesian scholars, students, and public intellectuals to visit the office to learn more about the Center and its activities.

The Jakarta office is one of the main conduits

for purchasing Indonesian-language books, journals, magazines, and other materials intended for the Center library. Apart from focusing on the acquisition of the latest publications, I am attempting to locate materials on the Chinese in Indonesia, with

particular emphasis on those published in Chinese. I have also concentrated on adding to the library's holdings on Indonesian literature and the arts.

Managing the liaison office has afforded me an excellent opportunity to expand the horizon of my research to include the comparative study of literature and politics. I have begun a serious study of late-colonial Indonesian-Chinese popular novels, exploring the ways in which Indonesian Chinese made sense of their everyday lives and construed, questioned, and reconceived their identity and roles in the wake of political developments that set the twentieth century in motion.

(Associate Professor of CSEAS)

連絡事務所だより

Letters from
Liaison Offices

2003年11月10日発行

発行 〒606-8501
 京都市左京区吉田下阿達町46
 京都大学東南アジア研究センター
 Tel (075) 753-7344
 Fax (075) 753-7356
 e-mail: editorial@cseas.kyoto-u.ac.jp
 編集 安藤 和雄・米沢真理子